特別連載

オーディオ人生(10)

ラフマニノフ　交響曲　第二番

五味康祐

ラフマニノフに三つの交響曲がある。

世評のごとく第二番（ハ短調）が傑出するのみで、あとの二曲は聴くだけ時間の無駄と言いたいほどの凡曲である。ラフマニノフはロシアの由緒ある貴族の出で、革命後はパリに亡命ののちアメリカへ移住したが、二十二才で書いたその交響曲第一番（ニ短調）が不評でノイローゼになってしまったのは有名な話だ。

およそ貴族には、二つのタイプがある。世間の酷評など物ともせずおのれの信するところを敢行する誇り高い――しばしば傲慢な――人物と、良家に育ったため感性はいたって繊細だが気の弱い、よくいえばお上品ではあるが自己主張というものをしきらぬ脆弱なタイプである。ラフマニノフは明らかに後者だろう。当然だから、その作品で世評にこたえ得るものは旋律性に富み、抒情的で、哀愁を

<Stereo Sound No.30 '74 spring>

①

湛え聴く者をロマンティックで甘美なおもいに誘う。このことは彼のほとんどの作品が《短調》で書かれていることからもうかがえる。有名な嬰ハ短調のプレリュード、ピアノ協奏曲第二番とともに、そしてこれ（交響曲第二番）がいわばラフマニノフの代表作ということになる。

私がこの二番のシンフォニーを知ったのは昭和二十七年の暮だった。ちょうど浮浪生活から立ちなおりかけてはいたが、精神的にまだ参っていた頃で、わかりやすいこのシンフォニーの抒情性が胸に泌みとおるように感じられた。この一曲で私はラフマニノフを好きになった。わかりやすい、という点に大げさにいえば私は感動したのだ。それだけこちらが世を拗ねていた所為だろうか？　こういう音楽は、いってみれば人畜無害で棘がないし、毒もない。バルトークやマーラーの作品のように傷がざっくり口をあけ、血をしたたらせていることがない。むろん、作曲者自身はどこかで涙を流しているだろう、本人が哭かずに哀切感のにじみ出るわけはないのだが、偏屈で何事にも観念的に対決しようとした当時の私は、マーラーやバルトークのようでないと純粋に音楽とは感じなかった。したがって、あっけらかんと感傷を語りかけてくるようなのは俗曲だときめていた。

そんな私を、たいそう浪曼的な気分でこの曲はつつんでくれたのだ。どうしてかわからないが、ラフマニノフの音楽が持つ甘さ、そのロマンティシズムにどっぷり私は浸りきってみたくなった。――以来、機会あるごとにラフマニノフのほかの作品を聴いた。そうしてわかったことは、悒愁やリリシズムに働きかける彼のような音楽家の作品は、ひとつ間違えば冗漫で手のほどこしようのない駄作になるということである。文学の場合と、この点はまるでかわらない。私の聴いたかぎり、前奏曲の一、二と管弦楽用に編曲された『ヴォカリーズ』（作品三十四『歌曲集』の一部）をのぞいては、すべて聴くにたえぬ凡曲であった。（有名なピアノ協奏曲第二番も私にはつまらない曲である）

そうしたつまらなさをくり返してゆくうちに、ふと私はおもった、ある作曲家に惹かれるのに二通りの道があることを。

若い時分――私の場合でいえば中学四年生のころ――私はベートーヴェンに夢中になった。それはベートーヴェンが偉大な音楽家であると物の本や人の話で聞いていて、さて自分でその音楽を聴き、なるほどベートーヴェンというのはすごいと得心した上で、血道をあげたわけである。もし誰もがベートーヴェンなど褒めなかったら、果して、それでもベートーヴェンに私は熱中したであろうか？　つまり絶讃する他者の声とかかわりなしに「気違いじみて大袈裟な音楽だ」とゲーテの眉をしかめたあの『運命』を、本当に素晴しいと私は思ったろうか、という疑問を感じる。むろん紛れもなくハ短調交響曲は傑作だから幾多の人々を感動させたので、ベートーヴェンの作品だからではない。言うまでもなく、感動はベートーヴェンの名前ではなく作品そのものにある。少々早熟な中学生の私が当時興

②

奮して当然だったとは思う。しかし、齢五十を過ぎて今、よく十代の小倅にこの作品がわかったものだと私は自分であきれるのだ。五十をすぎて、ようやく第五交響曲に燃焼させたベートーヴェンの運命のようなものが私には見えてきたから。

同じ《傑作》でも、チャイコフスキーの『悲愴』は今はつまらない。当時どうしてこんな曲に感激したか不思議なくらいだ。要するに若かったのだろうが、何にせよベートーヴェンの名を抜きにして当時の私のベートーヴェンへの傾倒は考えられない。つまり十代の私には、音楽作品を鑑賞する上で、あるいは夢中になるのに、或程度の世評は必要不可欠だったのを今にして悟るのである。

もう一つは、若気のあやまちともいうべき惹かれ方である。だれにもおぼえがあるだろうとおもう。メンデルスゾーンの『ヴァイオリン協奏曲』に、ドボルザークの『セロ協奏曲』に同じ時期私は聴き惚れ陶酔した。どちらも第一楽章にかぎられてはいたが、メンデルスゾーンとドボルザークはその頃の私にはベートーヴェンと同じ高さに位置する偉大な音楽家であった。敢ていえば夢中になったベートーヴェンでもそのヴァイオリン協奏曲よりラローの『スペイン交響曲』のほうが実は傑作だとひそかに思っていたのだ。シュナーベルによるベートーヴェンのピアノ・ソナタ全集が当時出ていたが、愛聴したのは『月光』や『告別』『熱情』であって、作品一〇六や一〇九、一一〇などまるで面白くなかったことを告白する。ついでにいえば、シュナーベルの『月光』よりパデレフスキーのほうが演奏としては好きだったことを。ひどい話だが、事実である。熱中したベートーヴェンでこの態だった。『ハンマークラヴィーア』や作品一一一の真価——前人未踏ともいうべきその心境を聴き取るにはそれから二十年の才月が（人生経験がではない）私には必要だったのである。

わかってもらえようか、『運命』はたしかに傑作であるが、『運命』を書いたからベートーヴェンは偉大なのではない。『運命』の前に交響曲としていっそう完璧な『英雄』を彼は書き、更に第五のあと第七と第九『合唱』を作った。それから後期弦楽四重奏曲を書くその刻苦勉励と向上の生涯で、はじめて、ベートーヴェンは楽聖の名を冠せられる。極言すれば、『運命』は絵画でいうまだ《若書き》だろう。大ゲーテを震撼させるほどの傑作でさえ若書きであるところにベートーヴェンの真の偉大さがある。

ラフマニノフには、それがなかった。ラフマニノフにとどまらない、メンデルスゾーンにもドボルザークにも、むろんラロにはなかった。ベートーヴェンに比肩しうるのはそういう意味ではバッハとモーツァルトくらいだろう。私にそれがわかったのは、四十ちかくなってからだ。漫然と年齢をかさねているうちにわかったのではない。二十年間音楽を聴きついで納得したことである。

聴く側も、つまり不断の努力を続けねば味到できぬ作品がある。音楽は、むろん聴けばその場でわかるものであり、フルトヴェングラーも言っているが音楽が鳴り出せば「どの道、人間は感情的にな

③

る。」しかし感情の起伏だけで反応のおわらぬ音楽も亦儼(また)として存在する。ぼくらを真に啓発してくれるのはそういう音楽だ。言えば神の啓示にあずからせてくれるものだ。そういう作品を一つでも多く、くりかえし聴くことを今の若い人たちに私は要望する。ラフマニノフの交響曲第二番にうっとり聴きほれた私がこれを言うのである。

オーディオに凝(こ)ってずいぶん私は音をいじってきた。再生音をよくした。何かのために音がきたなくなった時の憂鬱(ゆううつ)はたとえようもないもので、もう音楽を聴くどころではない、神の啓示など糞(くそ)クラえ、目の前は真っ暗であった。たしかに再生音が美しいときの喜びは格別で、筆舌につくし難い。しかしである、過不足ない状態で鳴っている装置をグレード・アップして味わえる喜びは、音楽そのものの有つ美しさ崇高さを享受できる喜びの深さに較べれば、些細なものであることをこの年になって私はさとった。経済的に余裕があれば、音を良くするに越したことはない。第一そのほうが鑑賞しやすい。しかし、装置にばかり金をかけ碌でもないレコードしか持っていない人を時おり見掛ける。本末転倒もはなはだしいと私はおもう。アシュケナージの弾くラフマニノフの『ピアノ協奏曲第二番』がいかにうまく鳴ったところで高は知れている。作品一一一のピアノ・ソナタを聴くほうがどれほどあなたにとって有益か。『惑星』や『三角帽子』をうまく鳴らす前にバッハの『マタイ受難曲』を聴き給え。（マタイ受難曲――「この傑作、あらゆる音楽で至上のもの」――フルトヴェングラー。）英国製のスピーカーを買いたくて私は時計を質に入れたことがあった。発売されたレコードならいつだって買えると、そのくせ私は思っていた。白状するがそんな時の私は結局ろくなレコードしか持っていなかった。つまり音がよくなったところで享受できる音楽性は高が知れていたのだ。そういう自らを省みて言うのである。どんなレコードを所持しているかは、どんな装置を持っているかより、はるかに恐しいことを銘記してほしい。きみの部屋で鳴っているのは装置の音ではなく、きみの全人生――音楽的教養そのものの音だといつも私の言う由縁がここにある。

ラフマニノフの交響曲第二番は今でも私は好きだ。時おり掛けて聴いているしこの曲の第二楽章アレグロ・モルトには、或る人の別な思い出がまといついている。いわば私自身の過去をこの曲で聴いている。しかし『マタイ受難曲』がなければ底の浅い慰藉にすぎぬと、人にも私自身にも言い捨てるだろう。古い装置を残しておくのはきらいなので私はすべて手離した。こんど、高校生になる娘のためにフィリップスのごく手頃な装置（とてもハイ・ファイとは申せぬ）を購入したが、それでマタイやホ短調のシンフォニーを試しに鳴らしてみて、音楽性にとって装置の良否など五十歩百歩なのをあらためて痛感した。それでこの文をしたためた。

若いうちにこそ、できるかぎりいい音楽を聴きこんでほしい。俗曲なぞ年をとればいくらだって聴けるのだから。

（つづく）

④